

モンゴル語融合形副動詞接尾辞-n の文法化*

橋本 邦彦 (室蘭工業大学)

キーワード: 副動詞、等位、分詞的、副詞的、文法化

1 はじめに

モンゴル語には 2 つ以上の節を等位接続するのに、主に、-aad/-eed/-ood/-ööd (母音調和の原則に従って交替; 以降-aad⁴と略記)、-z/-č (語幹末の子音に従って交替)、-n の 3 つの接尾辞がある。-aad⁴ は分離形副動詞接尾辞、-z/-č は結合形副動詞接尾辞、-n は融合 (モーダル) 形副動詞接尾辞と呼ばれている。これら 3 つの接尾辞によって結び付けられる節同士の間には、結合の度合いに強弱のあることが指摘されてきた。たとえば、Senderjav(2003: 115)は、(1a-c)のような副動詞接尾辞だけを交替させた等位文を挙げて、意味の違いを説明している (小沢 1986: 83 も参照のこと)。

(1) a. Bat daar-a-n xanjaad xür-čee.

 バト 寒気を感じる-EP-ASS 風邪をひく-PPST

 ‘Bat hat gefroren und sich erkältet.’

 b. Bat daar-č xanjaad xür-čee.

 寒気を感じる-ICC

 ‘Bat hat gefroren und sich erkältet.’

* 本稿を執筆するにあたって 2 名の査読者より貴重なご指摘をいただいた。感謝申し上げます。なお、誤りはすべて著者の責任に帰するものである。

用域などについては論じられているものの、複数の意味・機能の包括的な言及や、それらの間に生じる相互の関連性についての深い考察は全くなされてこなかった。そこで本稿では、融合形-nの意味・機能を分類、整理し、相互の関連性を文法化(grammaticalization)の視点から捉え直すことにしたい。この作業を通して、-nの意味・機能の実相が明らかとなり、その結果、-z/-čや-aad⁴との相違もより鮮明に浮かび上がってくるだろう。

第2節では等位接続の継起的、同時的、分詞的の3つの機能を観察する。第3節では-nの副詞的機能を、第4節ではイディオムの用法を扱う。第5節の結論で、複数の用法は-nの固有の意味を動機付けとした文法化により互いに関連し合っている事実を指摘する。

2 -nの等位接続機能

2.1 継起的機能

-nは(2)で示したように、モンゴル語の3つの等位型副動詞接尾辞の中で、最も節間の結合度の強いものである。ところが、-nには分離形-aad⁴と類似した、事態の継起性を表す例を見つけることができる。

(3) a. Ted gerl-ee untraa-n, unt-a-x-aar xevt-lee.

彼らは 灯り-RFL 消す-ASS 寝る-EP-NPS-INS 横になる-PST
 彼らは灯りを消して、寝るために横になりました。

b. Udaxgüj najz nar maan'manaj ger-t tsuglatsгаа-n minij

まもなく 友人 PL 1PL 私たちの 家-D/L 集まる-ASS 私の
 tör-sön ödr-ijg temdegl-e-x bol-no.

生まれる-PF 日-ACC 祝う-EP-NPS なる-PRS

まもなく私の友人たちが私の家に集まって、私の誕生日を祝って
 くれることになっています。<K&Ts: 389>

(3a)は「灯りを消して」から「横になる」行為が続く。(3b)は未来時についての記述であるが、「友人たちが集まった」後に「誕生日の祝い」が開始されるのである。どちらの等位文でも前半の副動詞節を導く-nは、結合度

の強い同時的な事態というよりも、時間軸に沿った前後関係にある事態を描写していると言える。それ故、たとえば(3a)を分離形-aad⁴に置き換えても、同じ意味の等位文を得ることができる。

(3) a⁷. Ted gerl-ee untraa-g-aad, unt-a-x-aar xevt-lee.

確かに、(4)に見るように、-n の継起的機能は、3 つ以上の節から成る等位文の場合に同一の接尾辞が並ぶのを避けるという文体的な要請によって用いられることもある。

(4) Bi öglöö bos-o-n tsaj-g-aa uu-g-aad mašin-d-aa
 私は 朝 起きる-EP-ASS 茶-EP-RFL 飲む-EP-PCC 車-D/L-RFL
 suu-ž ažil-d-aa yav-san.
 すわる-ICC 仕事-D/L-RFL 行く-PF
 私は朝起きて、朝食をとって、車に乗り、仕事に行きました。
 <K&Ts: 160>

(4)は、「朝起きる」、「朝食をとる」、「車に乗る」、「仕事に出かける」という 4 つの行為から成っている。これらの行為はすべて継起的に行われるのであるから、すべて分離形の-aad⁴ でつないでよいはずである。しかしながら、3 つの節は、-n、-aad、-ž という 3 つの、本来異なる結合度を有する接尾辞によって結び付けられている。これは、同じ接尾辞の繰り返しを避けるという文体上の要請により結合度の平準化が起こり、継起的な機能に収束した結果であろう。一方、(3a, b)は 2 つの節の結びつきそのものが問題であり、文体上の要因の入り込む余地はない。

2.2 同時的機能

2 つの事態が、多少の時間的ずれを含むにせよ、ほとんど重なって起こる場合がある。

(5) a. Ger-ijn ezeg-tej aximag nas-niy avgaj zomgol asaa-n
 家-G 主人-CMT 初老の 年齢-G 妻 木屑 燃やす-ASS
 togoo-toj xool-oo üz-e-ž baj-v.
 なべ-CMT 食事-RFL 見る-EP-ICC いる-PST
 家の主人と一緒に初老の妻が、木屑を燃やして、なべ料理を見てい
 ました。<MX: 171>

b. Najdan, Molom aav-iyŋ amriyg er-'ee gež böxösxij-n
 ナイダン モロム 父親-G 挨拶する-OPT QUT お辞儀する-ASS
 amarčl-a-v.
 挨拶する-EP-PST
 ナイダンとモロムは「父に挨拶しよう」とお辞儀をして挨拶しました。
 <MX: 82>

(5a)の「燃やす」ことと「見ている」ことは同時進行でなされている行為である。(5b)では「お辞儀をする」こと自体が「挨拶する」ことであるから、2つの行為は密接不可分である。

ここで注意したいのは、(5a)、(5b)とも-nの前後の節の主語が同一のものでなければならないということである。たとえば、(5a)の主語を異なるものにする、非文法的な文が生じてしまう。

(5) a'. *Ger-ijn ezeg-tej aximag nas-niy avgaj zomgol asaa-n oxin n'
 娘 3P
 togoo-toj xool-oo üz-e-ž baj-v.

(5a')の副動詞節の主語は「初老の妻」、主節の主語は「彼の娘」となっている。この点で、同じく行為の同時性を記述する-ž/-čとは異なっている。

(6) a. Bi üdees ömnö ger-t-ee suu-ž, düü-d-ee zurag
 私は 午前に 家-D/L-RFL いる-ICC 弟-D/L-RFL 絵
 zur-ž ög-löö.
 描く-ICC 与える-PST

私は午前中家において、弟に絵を描いてあげました。

b. Xonx duugar-č xičeel exl-e-v.

ベル 鳴る-ICC 授業 始まる-EP-PST

ベルが鳴って、授業が始まりました。

(6a, b)は共に副動詞節、主節の事態が同時に行われていることを表すが、(6a)の主語は同一の「私」であるのに対し、(6b)の主語は副動詞節では「ベル」、主節では「授業」となっている。-ž/-č が同時性を表示しながら、-n と違って異なる主語を容認できるのは、(2)で示された結合度の強さの度合いを反映しているからに他ならない。

2.3 同時的・分詞的機能

2つの事態が同時進行的でありながら、融合形-nの接辞する動詞と主節の定形動詞との間に意味上の従一主関係が成立すると、分詞的な色合いを帯びることになる。これは、日本語の「笑いながらおしゃべりする」の「～しながら」や英語の‘to come waiving’の現在分詞形と同様の働きである。いわば、定形の主動詞の事態について、その様態を記述するのである。これを-nの分詞的用法と呼ぶと、(7a, b)のような例を見出すことができる。

(7) a. Udalgüj önöõx xödöõ-nij büsgüj uxor-saar namančl-a-n

間もなく 例の 田舎-G 女性 退く-CNT 合掌する-EP-ASS

gar-č ir-e-v.

出る-ICC 来る-EP-PST

ほどなくして、例の田舎出の女が後退しながら手を合わせて出てきました。<Bittigau 2003: 179>

b. Xüüxed nad ruu xašgir-a-n dall-a-n güj-lee.

子供 私:D/L 方へ 叫ぶ-EP-ASS 手を振る-EP-ASS 走る-PST

子供が私の方へ叫びながら、手を振りながら走ってきました。

<K&Ts: 367>

(7a)では「出て来る」際の格好が「手を合わせて」いるのであり、(7b)では「走ってくる」様子が「叫んだり、手を振ったり」しているのである。

-n のこの用法は、心理動詞のように行為性の低い動詞においても観察できる。

(8) a. Minij düü xüüxd-ijn bayar-t orolts-o-x-oor bayarl-a-n
 私の 弟 子供-G 祝日-D/L 参加する-EP-NPS-INS 喜ぶ-EP-ASS
 güj-ž gar-laa.

走る-ICC 出る-PST

私の弟は子供の日に参加するために、喜びながら走って出て来ました。

b. Ter üye-ees exl-e-n MAXH ard түмн-ee
 その 時期-ABL 始まる-EP-ASS モンゴル人民革命党 国民-RFL
 zorigžuul-a-n zoxin bajguul-ž ir-lee.

勇気づける-EP-ASS 組織する-ICC 来る-PST

その時期から始まるモンゴル人民革命党は国民を勇気づけながら組織してきました。

(8a)、(8b)とも心理状態を表す動詞が副動詞化することで、後続の動詞句の行為の様態を示している。

融合形-nの様態表示の程度がさらに強くなると、定形動詞と一体化して、連鎖動詞を形成する。

(9) a. Töl Gil xoyor Angar mörn-ijg getel-ž, Enisej
 トウル ギル 二人 アンガル 河-ACC 渡る-ICC エニセイ
 xemeex mörön-d or-o-n oč-i-v.

と言う 河-D/L 入る-EP-ASS 行く-EP-PST

トウルとギルの二人はアンガル河を渡り、エニセイという河に入って行きました。<MX: 110>

b. Ter bodlogošr-o-n suu-na.
 彼は について深く考える-EP-ASS すわる-PRS

彼は沈黙考していました。<K&Ts: 158>

(9a)の「入って行く」も、(9b)の「沈黙考している」も定形動詞は一般の行為性を示すばかりで、中心的な意味は副動詞に移行している。意味の面で、主と従の関係が反転しているわけである。この反転は、副動詞と定形動詞が密接不可分の連鎖動詞を形成していることの証左となっている。

2.4 同時的・副詞的機能

-n の副動詞形が主節の定形動詞との意味的な従属関係の度合いを強くしていくと、独立した行為性が希薄となり、定形動詞を修飾する様態の副詞の機能をもつに至る。文字通りの副詞と言いつれないのは、なお行為の同時性の意味合いを保持しているように思われるからである。

(10) a. Xoyor övgön morin-oos-oo buu-ž, tsömtsij-n
二人の 老人 馬-ABL-RFL 降りる-ICC 円くこじんまりする-ASS
suu-v.

すわる-PST

二人の老人は馬から降り、円くなってすわりました。

b. Daraax' ögүүлber-ijg engijn xüürn-e-x ayalg-aar
次の 文-ACC 通常の 肯定する-EP-NPS アクセント-INS
ürgelžil-üül-e-n yar'.

続く-CST-EP-ASS 言う-φ

次の文を通常の肯定アクセントで続けて言いなさい。

(10a)では「円くなる」と「すわる」とは同時的で分離できない行為である。副動詞形 tsömtsij-n は「円くなる」という行為性は保持しながらも、座り方を記述する役割も演じている。同様に、(10b)も、「続ける」と「言う」とは密接不可分な行為であると同時に、ürgelžil-üül-e-n は話し方の様態を表しているのである。

3 融合形-n の副詞的機能

副詞の機能は、動詞、形容詞、副詞、文を修飾するところにある。融合形副動詞接尾辞-n の動詞から副詞への文法化は、英語の adverb(ad-「付く」+verb「動詞」)の元来の意味通り、動詞に隣接する統語環境で引き起こされる。したがって、このセクションでの関心は、どのようなタイプの動詞に先行すると副詞化が生じるのかにある。

まず第 1 のタイプとして、関連した意味の動詞が隣接する場合が挙げられる。

- (11) a. Ger-t xüüxd-üüd ineeld-e-x-ijg sonos-ood tend
 家-D/L 子供-PL 笑う-EP-NPS-ACC 聞く-PCC そこに
 yaar-a-n or-loo.
 急ぐ-EP-ASS 入る-PST
 家で子供たちが笑うのを聞いて、そこに急いで入りました。
- b. Bi zaluu baj-x üye-d-ee angli xel-ijg
 私は 若い いる-NPS 時期-D/L-RFL イギリス 言語-ACC
 šamd-a-n sur-san.
 (仕事に)精を出す-EP-ASS 勉強する-PF
 私は若い頃、英語を一所懸命に勉強しました。<K&Ts: 315>

(11a)の「急ぐ」は運動の動詞「入る」と意味上密接に関連している。同様のことは、(11b)の「精を出す」と「勉強する」の間にも成立する。-n 副動詞形は主節動詞に形態的にも意味的にも従属するのだから、主節動詞の意味の様態を記述する副詞として用いられたとしても不思議ではない。

主節動詞が状態動詞であっても、-n 副動詞形は副詞化する。

- (12) a. Tüünij eex xödöö-n-öös ir-sen-d xöl ald-a-n
 彼の 母親 田舎-n-ABL 来る-PF-D/L 足 失くす-EP-ASS
 bayarl-a-v.
 喜ぶ-EP-PST

彼の母親が田舎からやって来た折、うきうきと喜んだ。<K&Ts: 60>

- b. Övs nogoo saxlag-aar žigdr-e-n delger-eed
 草 草 生い茂った-INS 平らにする-EP-ASS 広がる-PCC
 ariun agar ix l taalamžtaj.
 清い 大気 大変 EMP 気持ちよい
 草が生い茂って平らに広がっており、澄んだ空気が大変心地よい。
 <MX: 164>

(12a)の xöl ald-a-n 「心はずませる(lit. 足を失くす)」は比喩的な動詞句であるが、心理動詞 bayarl- 「喜ぶ」様子を描写している。(12b)の žigdr- 「平らにする」も delger- 「広がる」形状を描いている。

-n の接辞した副動詞の副詞化は、擬音・擬態語で顕著である。副動詞は、主節動詞の動作の様子を五感に訴える形で描写する点で、意味的に強い関連性を有している。

(13) a. Negdügeer tsag-ijn xičeel-ijn xonx žingen-e-n

第一の 時間-G 授業-G ベル りんりんと鳴る-EP-ASS

duugar-a-v.

鳴る-EP-PST

第1時間目の授業のベルがりんりんと鳴りました。<MX: 14>

b. Gol-iyen us xoržingn-o-n urs-a-na.

川-G 水 さらさらと音を立てる-EP-ASS 流れる-EP-PRS

川の水がさらさらと流れます。<塩谷&プレジャブ 2001: 49>

(13a)の「りんりんと」も(13b)の「さらさらと」も、ほとんど唯一的に「鳴る」と「(水が)流れる」とに結びつくと思われる。

意味の関連性がさらに強くなると、同じ意味の語が隣接し合い、-n 形副動詞が副詞的に主節動詞を修飾する。

(14) Namajg bitgij širt-e-n xar!

私:ACC NEG 見つめる-EP-ASS 見る-φ

私をじっと見ないでください。<K&Ts: 158>

(14)の副動詞の意味は「見つめる」であり、主節動詞 *xar*-の意味も「(意図的に) 見る」である。モンゴル語では名詞、形容詞、動詞などで同じ意味の語を並列させ、その意味を強める形式があるが、*širt-e-n xar* もその形式をベースにしなが、主節動詞の様態を明示的に引き出す効果を与えている。

関連性の度合いが最大になると、ついには同じ動詞が並ぶ。

(15) *Bat eež-ijg-ee xar-a-n xar-a-n ujł-na.*
 バト 母親-ACC-RFL 見る-EP-ASS 見る-EP-ASS 泣く-PRS
 バトは母親をじっと見つめて泣きます。<K&Ts: 159>

(15)の2つの副動詞形について詳しく見るなら、その働きは微妙に異なっている。最初の *xar-a-n* は(14)同様副詞的に後続の副動詞を修飾している。一方、2番目の *xar-a-n* は「泣く」ことと同時的な行為を表すという点で、本来の融合形副動詞の機能を保持している。

(11)~(15)で言及した例はすべて、関連した、もしくは同じ意味の動詞が隣接した場合に、*-n* 形副動詞が副詞化する事実を示すものであった。意味の類似性・同一性は、副詞化の大きな要因であるが、それだけでは文法化は完成しない。特定の意味の動詞から離れて、様々な動詞を修飾できるようになってようやく、*-n* 形副動詞が副詞としての機能を獲得したと言えるのである。この一般化の例を、次に見ていこう。

(16) a. *Büx yum-iyg zaavar-t durd-san-aar des*
 すべての もの-ACC 指示-D/L 言及する-PF-INS 順序
daraal-a-n xij-x xeregtej.
 配置する-EP-ASS する-NPS ねばならない
 すべてのものを指示の中で言及した通りに順序だてて行わなければなりません。<K&Ts: 318>

- b. Saaral mor' n' gua sajaxan dörvön xöl-öör-öö
 灰色の馬 3P 美しい 美しい 4+ 足-INS-RFL
 eelžl-e-n gazar čavčil-na.
 交替する-EP-ASS 地面 (馬などが足で)地面を掘る-PRS
 灰色の馬は美しい見事な四肢で替わる替わる地面を蹴るのです。

(16a, b)の-n 形副動詞には、それぞれの動詞の表す行為性の名残が感じられるかもしれない。それでも、(16a)の「順序だてて」は特定の行為と結びついているのではなく、行為一般を示す xij-「する、行う」を修飾している。(16b)の「替わる替わる」も、たとえば、eelžl-e-n tseverl-「替わる替わる掃除をする」とか eelžl-e-n duu duul-「替わる替わる歌を歌う」のように、交替で繰り返しなされる行為さえ表せばどんな動詞でも修飾できるのである。

融合形副動詞の副詞化の度合いがさらに進むと、もはや行為性そのものが感じられなくなる。

- (17) a. Mön yum-iyg xar'tsuul-a-x, ontsl-o-n
 同じもの-ACC 比較する-EP-NPS 特別にする-EP-ASS
 tusgaarl-a-xad garaxiyn tijn yalgal xeregl-e-deg.
 分かつ-EP-TM 奪格 用いる-EP-HBT
 同じものを比較して、特に分かつ時、奪格形を用いる。

- b. Am'temts-sen maš berx šuurgan-aar, tsoriyn gants
 息を切らす-PF 非常に 困難な 嵐-INS たった一つの
 ajl-iyg az dajr-a-n ol-o-v.
 住居-ACC 幸運 ぶつかる-EP-ASS 見つける-EP-PST
 息も詰まるとてもひどい嵐の中で たった一つの住居を運よく見つけました。<MX: 161>

(17a)の ontsl-o-n「特に」にも(17b)の az dajr-a-n「運よく」にも-n 形副動詞の臭いは希薄で、むしろ分析せずに一語の副詞として捉えた方が実態に即しているように思われる。

動詞の副詞化は、モンゴル語に特有の現象ではない。Lord(1993: 215)は、

動詞連鎖構文(serial construction, たとえば、日本語の「買ってくる」、「見せてあげる」など)で、前置された他動詞の意味が劣化すると、目的語をとる前置詞として機能するのに対し、自動詞の意味が劣化すると、元々目的語をとらないので、後続の動詞を修飾する副詞として機能することを述べている。また、Kortmann(1995: 198)は、英語の分詞が様態の副詞のような振る舞いをする事実を指摘している。

(18) a. Mary left smiling.

b. He stood in the darkness panting. <Kortmann 1995: 98>

これは、分詞 smiling、panting が直接定形動詞に後続し、同じ主語を共有することにより、定形動詞と密接不離の関係になったからであると考えられる。分詞が定形動詞の補語として、その表す意味の機能を修飾するわけである。

-n 形副動詞の副詞化の要因にも、連鎖動詞構文や英語の分詞と同様に、定形動詞との位置の密接性と主語の同一性による前後の行為/事態の一体性が関与していると言ってよいだろう。

4 イディオム化

前節で述べた一体性が極みに達すると、-n 形副動詞と主節動詞との間に意味の融合が起こり、2つの動詞が並置型動詞句ではなく、2つの動詞要素から成る1つの動詞として機能する。

(19) a. Bi xuvtss-aa sol'-n öms-son.

私は 服-RFL 替える-ASS 着る-PF

私は服を着替えました。

b. Üjldver-ijn xeregsel bagž-ijg šinetg-e-n öörčl-ö-v.

生産-G 設備 器具-ACC 更新する-EP-ASS 変える-EP-PST

生産設備を改善しました。

(19a)の *sol'-n öms* は文字通りの「替えて着る」のではなく、「着替える」という 1 つの行為を示している。同様に、(19b)の *šinetg-e-n öörčl-* も「更新して変える」ではなく、「改善する」という分析できない意味をもつ。2 つの動詞が 1 つの他動詞であるということは、1 つの同じ目的語をとっている事実から確認できる。

(19a, b)では *-n* 形副動詞と定形動詞の意味が関連はしながらも異なっているので、前者が後者の様態を記述するというニュアンスは残存しているが、両者がほぼ同じ意味の動詞になると、1 語の動詞のように感じられる。

(20) a. *Ter namajg batl-a-n daa-san.*

彼は 私:ACC 保証する-EP-ASS 保障する-PF

彼は私に請合ってくれました。<K&Ts: 373>

b. *Ter namajg elegseg dotn-oor xülee-n*

彼女は 私-ACC 献身的な 親しい-INS 受け取る-ASS

av-laa.

受け取る-PST

彼女は私を優しく親切に受け入れてくれました。

文字通りに解釈すれば、(20a)の *batl-a-n daa* は「保証して保障する」であり、(20b)の *xülee-n av* は「受け取って受け取る」となり、無意味に冗語的である。むしろ、*-n* 形副動詞と定形動詞が完全に融合して、形は 2 つでありながら意味は 1 つの複合動詞を形成していると考えるのが自然なように思われる。その証拠として、(20a, b)の複合動詞がただ 1 つの直接目的語 *namajg* を項として持っていることが挙げられる。

もう 1 つ別のタイプのイディオム化は、*-n* 形副動詞が定形動詞の意味の中に取り込まれてしまう場合である。副動詞が副詞化すると、主節動詞を修飾するはずなのに、ここでは反対に、主節動詞の方が副動詞を修飾しているように見える。

(21) a. *Bi xel-e-n ald-laa.*

私は 話す-EP-ASS 危うく～する-PST

私は危うく話すところでした。<K&Ts: 210>

b. Bi ter üxr-ijg al-a-n ald-a-v.

私は その 牛-ACC 殺す-EP-ASS 危うく～する-EP-PST

私はその牛を危うく殺すところでした。

(21a, b)は動詞の意味上の核は定形の主節動詞 ald-にではなく、本来従属的な、あるいは補語的な立場にある-n 形副動詞にある。それは、(21b)の直接目的語 üxr-ijg が al-「～を殺す」の項であって、ald-「危うく～する」の項ではない事実からわかる。動詞語幹-n + ald-の複合動詞句が成立するのは、2つの動詞が意味的に十分融合して1つの機能を果たせるからに他ならない。

5 むすび

融合-n 形副動詞の副詞への文法化の要因として、第 1 に、後接する定形主節動詞との意味の結合度が挙げられる。2つの動詞の表す意味の結びつきが強ければ強い程、-n 形副動詞は副詞的機能を帯びていく。これを階層で図示すると、次のようになる。

(22) 副動詞と主節動詞の間の意味の結合度の階層：

←weaker/less adverbial

stronger/more adverbial→

継起的>同時的>同時的/分詞的>同時的/副詞的>副詞>イディオム

等 位 接 続 用 法

-n 形副動詞の本来の意味は等位接続であり、独自のテンス・アスペクトを持たずに主節動詞に依存する分従属的である。この等位接続機能は一樣ではなく、(22)に見るように、意味の結合度から4段階に分かれている。

副詞への文法化の第 2 の要因は、-n 形副動詞と主節動詞の意味の関連性である。意味の関連度が大きい程、副動詞は副詞的な機能を帯びていく。これを図示すると、次のようになる。

(23) 副動詞と主節動詞の間の意味の関連度の階層：

←less associated/less adverbial more associated/more adverbial→
非関連動詞 > 関連動詞 > 類義動詞 > 同義動詞

(22)、(23)とも度合いが強くなりすぎると、隣接する動詞が意味的に一体化してしまい、副詞性そのものが劣化し、イディオム化する。また、意味の結合度と関連度は密接な関係にある。意味の関連度の高いものは、当然結合度も強いからである。

以上の考察を踏まえて融合-n 形副動詞の文法化を図示すると、次のようになる。

(24) 融合-n 形副動詞の文法化の流れ図：

関連した意味 /類似の意味 /同じ意味の動詞の隣接： 様態表示
(e.g. (11), (12), (13)) (e.g. (14)) (e.g. (15)) 機能

↓ 脱関連化

非関連/非類似の意味の動詞の隣接： 様態表示機能
の一般化

↓ 脱行為化

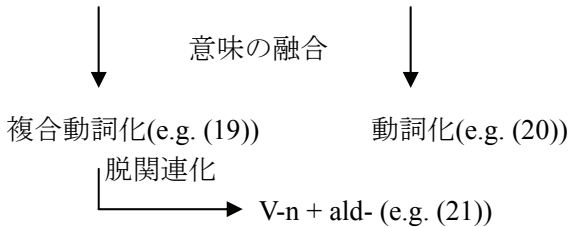
副詞と動詞の隣接： 修飾機能

文法化の流れ図は、最初に、意味の関連した（類似、同一のものを含む）隣接し合う動詞からスタートする。この状況で、-n 形副動詞は統語上定形主節動詞に依存するので、意味的に主節動詞の意味の様態を記述する役割を担う。様態表示機能は意味の関連性から解き放たれ、より自由に多くの動詞と結びつくことで、副詞的な様相を獲得していく。-n 形副動詞にはそれでもまだ動詞に内在する行為性が残存している。これを最小限にまで脱色して初めて十全な副詞としての機能を持つに至るのである。

この副詞への文法化とは別に、イディオム化の流れが存在する。イディオム化は語彙化の一種であるが、次のように図示できる。

(25) 融合-n形副動詞のイディオム化の流れ図

関連した意味の動詞の隣接 / 同じ意味の動詞の隣接



イディオム化は意味の融合が大きな要因として働く。他方、文法化では意味的な関連性はあるても、あくまでそれぞれの意味の独立性は保持される。なぜなら、密接に関連しながらも異なることで、様態の修飾という副詞の中心的な機能が実現できるからである。

イディオム化と文法化の共通点もある。それは、どちらも関連した意味の動詞が隣接し合う所から出発する点である。今後の課題として、秋山(2002)が英語史の資料を用いて詳細な分析を展開したように、文法化とイディオム化の関係を、他の言語事実の分析を通して究明していく必要があるだろう。

【省略記号対応表】

ABL: Ablative (奪格形)、ACC: Accusative (対格形)、ASS: Associative Converbial (融合形副動詞)、CMT: Comitative (共同格形)、CNT: Continuative (継続形)、CST: Causative (使役形)、D/L: Dative/Locative (与位格形)、EMP: Emphatic Particle (強調不変化詞)、EP: Epenthetic Vowel/Consonant (挿入母音/子音)、G: Genitive (属格形)、HBT: Habitual (習慣形)、ICC: Imperfective Coordinative Converbial (未完了等位接続形副動詞)、INS: Instrumental (具格形)、NEG・IMP: Negative Imperative (否定命令辞)、NPS: Non-Past (非過去形)、PCC:

Perfective Coordinative Converbal (完了等位接続形副動詞)、PF: Perfective (完了形)、PL: Plural (複数形)、PPST: Perfective Past (完了過去形)、PRS: Present (現在形)、PST: Past (過去形)、RFL: Reflexive Possessive (再帰所有形)、TM: Time Specifying Converbal (時間指定形副動詞)、1PL: 1 Plural Clitic (1人称複数形所有後接語)、3P: 3rd Singular Clitic (3人称単数形所有後接語)、φ: Zero Case (ゼロ格形)

【引用文献省略対応表】

K&Ts: Kullmann and Tserenpil (1996), MX: Byambasan (ed.) (1979)

【参照文献】

秋山実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房。

Binnick, Robert I. (1979) *Modern mongolian: a transformational syntax*. Toronto: University of Toronto Press.

Bittigau, Karl Rudolf (2003) *Mongolische grammatik: entwurf eine funktionalen grammatik(FG) des modernen, literarischen chalchamongolischen*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Byambasan, P. (ed.) (1979) *Mongol xel 5 анги*. Ulaanbaatar: BNMAU Ardiyn Bolovsroliyn Yaamaniy Xevlel.

橋本邦彦 (1991) 「等位文の主語の省略」『室蘭工業大学研究報告文科編』41: 73-110.

フフバートル (1993) 『モンゴル語基礎文法』 たおフォーラム。

Kas'yanenko, Z. K. (2002) *Sovremenniy mongol'skij yazyk*. Moskva: Izgatel'skij Dom «Muravej».

Kortmann, Bernd (1995) 'Adverbial subordinators in the languages of Europe'. In: J. van der Auwera (ed.) *Adverbial constructions in the languages of Europe*. 457-561. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Kullmann, Rita and D. Tserenpil (1996) *Mongolian grammar*. Hong Kong: Jensco.

Lord, Carol (1993) *Historical change in serial verb constructions*. Amsterdam:

John Benjamins Publishing Company.

小沢重男 (1986) 『増補モンゴル語四週間』 大学書林.

———— (1993) 『元朝秘史蒙古語文法講義』 風間書房.

Poppe, Nikolaus (1951) *Khalkha-mongolische grammatik*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH.

———— (1970) *Mongolian language handbook*. Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.

Senderjav, Alimaa (2003) *Parataktische teilsätze im khalkha-mongolischen verso hypotaktische teilsätze im deutschen: ein beitrag zur sprachlehrforschung*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

塩谷茂樹・E. プレブジャブ (2001) 『初級モンゴル語』 大学書林.

Skorodumova, L. G. (2002) *Učebnik mongol'skogo yazyika*. Moskva: Muravej.

Street, John C. (1963) *Khalkha structure*. Bloomington: Indiana University.

Vietze, Hans-Peter (1978) *Lehrbuch der mongolischen sprache*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

The Grammaticalization of the Associative Converbal Suffix *-n* in Mongolian

Kunihiko HASHIMOTO

The purpose of this paper is to classify several functions of the associative (modal) converbal suffix, *-n*, in Mongolian, and explicate the mutual relationship among them in terms of grammaticalization. Almost all of the previous studies have just investigated how to use the suffix, its main functions such as cotemporality of events and modal modification, and its usage region. However, they have neither exhausted all functions of the suffix nor indicated any their reciprocal connection. Closer examination shows that the associative converbal suffix shifts the functions from multiple coordinative to participle to adverbial in a way of grammaticalizing. Besides that, it develops into idiomatization in a very similar way to the grammaticalization.

The findings are as follows:

- (1) The grammaticalizational shift progresses from the coordinative function to the adverbial one gradually, forming a kind of cline.
- (2) The degrees of similarity between a converbal verb and the following finite verb dedicate themselves to the grammaticalization into the adverbial function.
- (3) The idiomatization has another gradual change different from the grammaticalization, although it goes along a similar path.

Common Subject Division

Muroran Institute of Technology

27-1 Mizumoto, Muroran, Hokkaido 050-8585, Japan

E-mail: kuni3587@mmm.muroran-it.ac.jp